

8. 桧隈寺第4次（門・東回廊跡）の調査

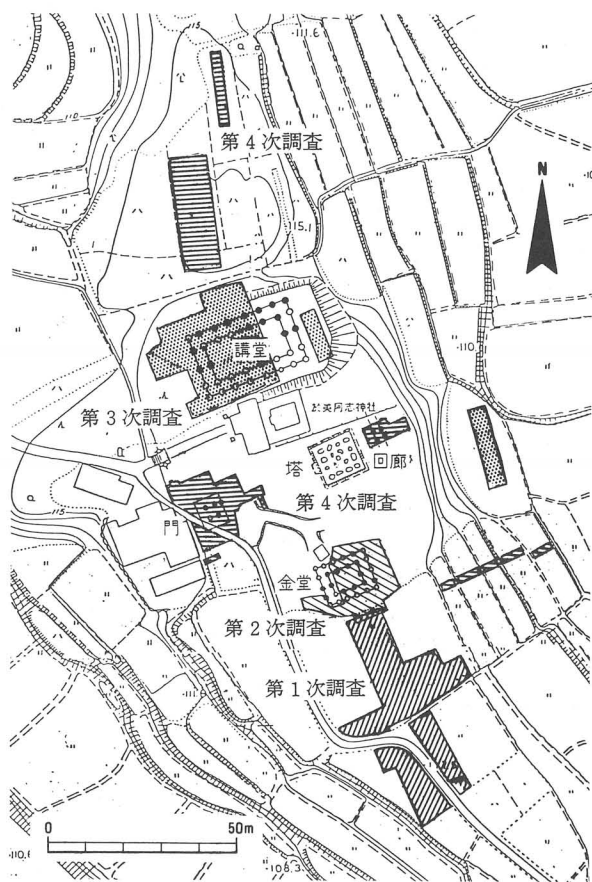
（昭和57年7月～12月）

桧隈寺は、応神朝の渡来人阿知使主を祖とする倭漢氏一族の氏寺とされている。寺跡は、高取山から北西へ延びる丘陵上にあり、現在は、於美阿志神社の境内地となっていて、大小4つの土壇と礎石などが残されている。

桧隈寺における発掘調査は、昭和44年の奈良県による調査が最初である。その調査では、塔基壇上にある十三重石塔の解体修理にともない、塔の規模と構造を明らかにするとともに、出土軒瓦から塔が7世紀末から8世紀初頭に造営されたことを推定した。また、塔の東で、花崗岩自然石の礎石1個を検出して、回廊所用の礎石と考えている。昭和54年からは、当研究所が伽藍配置の確定に主眼をおいて、継続

的に調査を進めることとなり、今回で第4次調査を迎えた。第1次調査では、従来推定されてきた法起寺式伽藍配置に従って、南門の検出にತ್ತめたが顕著な遺構は検出されなかった。第2次調査では塔の南にあって、従来中門とされてきた土壇を中心に調査を行ない、土壇が金堂跡であることを確認した。その結果、従来の伽藍配置想定は根本的な変更をせまられることになった。第3次調査では、塔の北に残る大土壇が講堂跡であることを明らかにした。

これらの調査を通して、桧隈寺の主要伽藍を構成する個々の建物についてはほぼ明らかになったわけであるが、その伽藍配置は、従来の推定



第25図 桧隈寺調査位置図（1：2000）

のような法起寺式ではなく、塔の北に講堂があり、南に金堂をおくという他に例をみない特異な配置であり、それらの建物は真北に対して西へ23°余振れたものである。

今回の調査は、上記の成果をうけて、主要建物をめぐる回廊などを確認することによって、伽藍配置をより明確にする目的で、塔西方の小土壇とその周辺および、塔東側の回廊推定地において実施した。また、あわせて、食堂・僧房などの存在が想定された講堂北方の畑地にも調査区を設定した。

調査の結果、塔西方の小土壇は礎石だち建物の基壇であり門跡と考えられることが明らかになり、塔の東では東回廊の遺構を検出した。しかし、講堂北方の調査では、表土層の直下で花崗岩風化土の地山があらわれ、桧隈寺に関する遺構や遺物は認められなかった。この地山面は第3次調査で確認した講堂周辺の地山面よりも約80 cm低く、後世の削平により遺構が失われたものと理解された。なお、これらの調査と併行して、金堂の東側の傾斜地（県有地）にも、桧隈寺関連遺構の広がりを確認するために、いくつかの小トレンチを設けたが、遺構は全く検出されなかった。ここでは、塔西方の小土壇で検出した基壇建物SB500と、塔東側の東回廊とについてその概要を報告する。

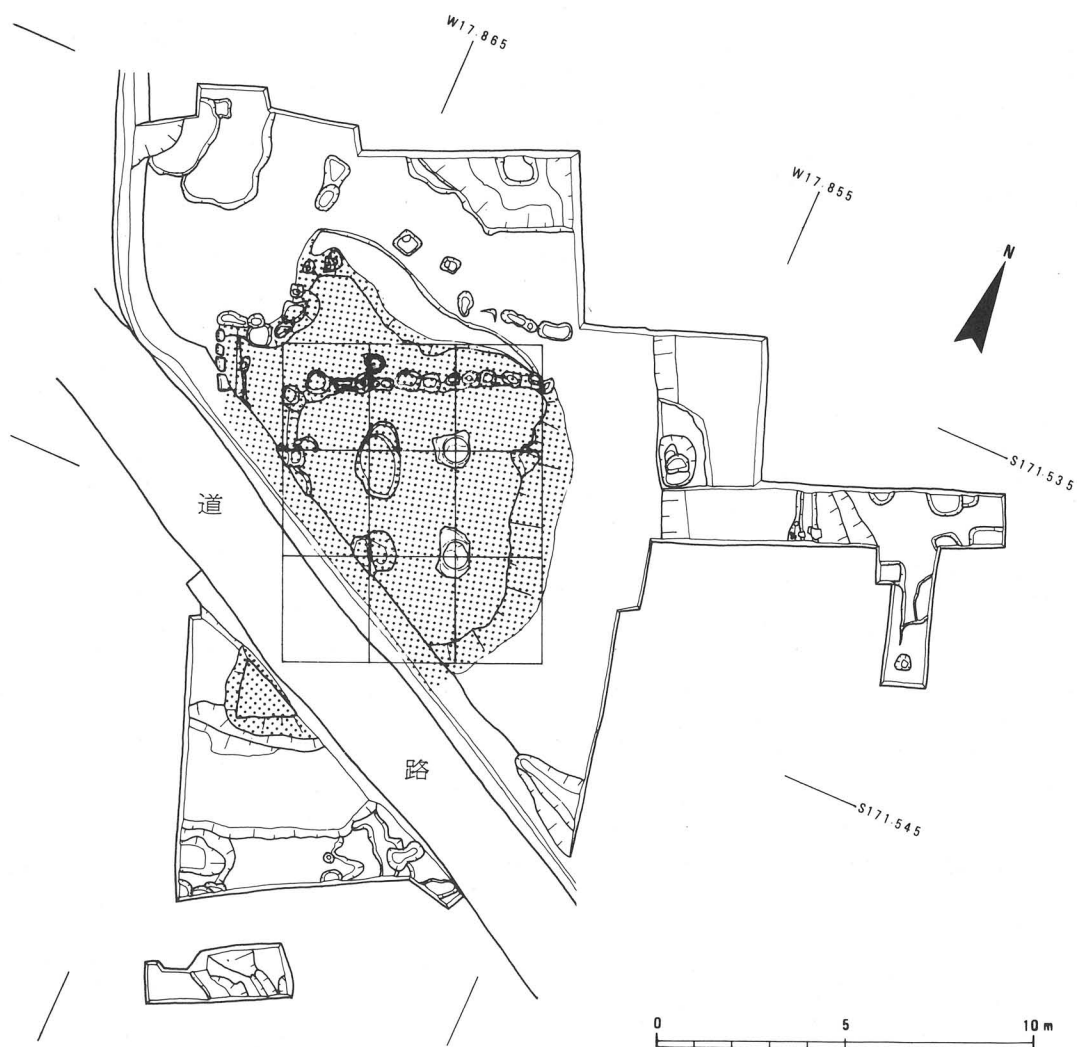
基壇建物SB500 塔西方の小土壇は、その西南部が道路で削られるなど後世の著しい削平を受けて1辺7 m余の三角形となっているものの、上面に礎石が遺存し、また、その位置から回廊あるいは西塔跡と推定されてきた。調査は、遺存する礎石を手懸りとして土壇上およびその周辺とで進めたが、いずれも後世の攪乱が著しく、ほとんどの遺構が表土層直下に痕跡的に残されたものであるなど困難な点も多かった。調査の結果、土壇は版築工法で築かれた建物基壇であることが判明した。検出した遺構には基壇建物SB500に関するものとしては、基壇上に露出していた礎石2個のほか、礎石抜取穴3、基壇西側の玉石列などがある。そのほか、後世の遺構として、基壇上および基壇北辺の石列抜取痕跡、基壇東辺の切り通しによる旧道や階段状の踏石などがある（写真8）。

基壇上の2個の礎石はいずれも1～1.2 mの不整形な花崗岩で、上面には直径約60 cm、高さ約8 cmの円柱座の造り出しがある。礎石は、基壇築成後に掘形を掘って据えられており、掘形の底には拳大の玉石を詰めて根石としている。いずれも原位

置を保っており、約 2.8 m の間隔で南北に並んでいる。その方位は、真北に対して西へ約 23° 振れており、これまでに確認した桧隈寺の建物方位と一致している。

礎石抜取穴は、それぞれ遺存する礎石に対応する位置に、その東側で 1 個、西側で 2 個検出した。西側の 1 個と東側のものは削平を受けており、一部を確認するにとどまった。西北のものは東西 1.5 m、南北 1.8 m、深さ 20 cm の平面楕円形で、摺鉢形をした底には根石とみられる玉石が遺存した。礎石とその東西の礎石抜取穴とは約 2.1 ～ 2.4 m の距離にある。

土壇西端の玉石列は、30～40 cm 大の花崗岩自然石を西に面を揃えて南北に立て並



第26図 SB 500 調査遺構配置図（網目：基壇土，1：200）

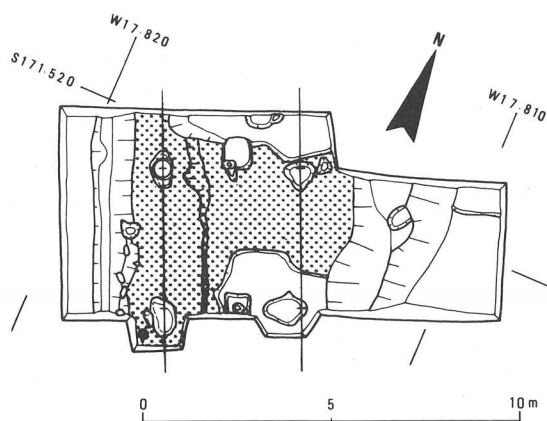
べたもので、4個1.7 m分が残存していた。玉石列の東側に黄色粘土の基壇土がみられ、西側に厚さ10 cmの瓦層があり、さらには、この石列の方位が礎石の方位と一致していることから、これが基壇西縁の化粧石であることは明らかである。礎石から基壇西縁までは6.3 mであり、基壇高は0.9 mである。玉石列に北接して並ぶ石列抜取痕跡は、約1.6 m東で北折し、基壇縁玉石列かと思われたが、基壇上に東西に並ぶ石列痕跡とともに、中から瓦器が出土し、後世に基壇の高まりを利用して建てられた建物に伴うものと考えた。

基壇の築成は、地山の傾斜にあわせて西側で厚くした整地土（濃茶色土）の上に、褐色粘質土を主とした粗い版築を行ない、その上に黄色粘質土による細かい版築を重ねて築いている。基壇は玉石列の南を道路で大きく削られているが、道路の西南に一部残存しており、その西端はほぼ玉石列の延長上にあつて、基壇西縁をかううじて示している。また南端についても同様に基壇南縁に近いものと思われるが、東縁については、古図に記された旧道にあたる溝状の切り通しやその東岸の階段状に並ぶ踏石など、近世・近代の遺構で大きく削平されていて明らかでない。北縁については、先述の玉石列抜取痕跡にそつて基壇土の不整形な張り出しがあり、その上面はなだらかに北へ向かつて下降している。

以上のように、SB 500は版築工法による基壇と玉石積の基壇化粧をもつ礎石建物であつて、回廊跡とは考えがたい。礎石や礎石抜取穴の位置から建物規模は東西2間以上、南北1間以上であることがわかり、玉石列・基壇土の広がりを考え合

と、南北3間（柱間2.8 m等間）、東西3間（2.3 m等間）と推定される。その場合の基壇の出は1.7 mとなる。

SB 500の礎石は金堂・講堂の礎石より小さく、基壇も低いもので、主要伽藍を構成する建物としては貧弱である。また、本建物の心を東に延長すると塔心礎にほぼ一致し、金堂と講堂の中点に合致していることから、この建



第27図 東回廊調査遺構配置図（網目：基壇土，1：200）

物は、門跡と考えられるのである。その場合、基壇土の北への張り出しは、回廊のとりつきを示しているものと考えられよう。造営年代については、基壇土、整地土層から7世紀前半代の土器や瓦片が数点出土しており、また、礎石に円柱座の造り出しがあり、比較的丁寧な版築で基壇が築かれるなど、金堂との類似点がみられ、7世紀後半代に推定される金堂とはほぼ同時期かと思われる。

東回廊 昭和44年の塔跡調査の際に検出された礎石を含む北側で調査を行なった。その結果、新たに1個の礎石とその東に2ヶ所の礎石抜取穴を検出したほか、両者の中央で、掘立柱塼とみられる柱穴2個、礎石の西側で南北溝1条などを検出した。

南にある先の調査で検出した礎石は、上面の平坦な1.1×0.7m大の花崗岩自然石であるが、今回検出した礎石の上面には直径40cmの円柱座が造り出されている。礎石はいずれも回廊基壇の築成にさきだって据えられ、原位置を保って遺存していた。礎石抜取穴は0.8～1m余の不整形な平面形で、その位置から礎石と一体となって、桁行3.7m、梁行3.6mの単廊を構成するものとみられた。回廊基壇は付近一帯の大規模な整地地業の後に築成されており、整地層は回廊付近では礎石下2mにまで達している。この整地層は塔跡下部で確認された整地層と一連とみられる。

礎石と礎石抜取穴との中央で検出した柱穴は一辺0.7mの掘形で直径25cmの柱痕跡をもつものである。柱間4m未満の掘立柱塼であろうが、時期・性格ともに不明な点が多い。

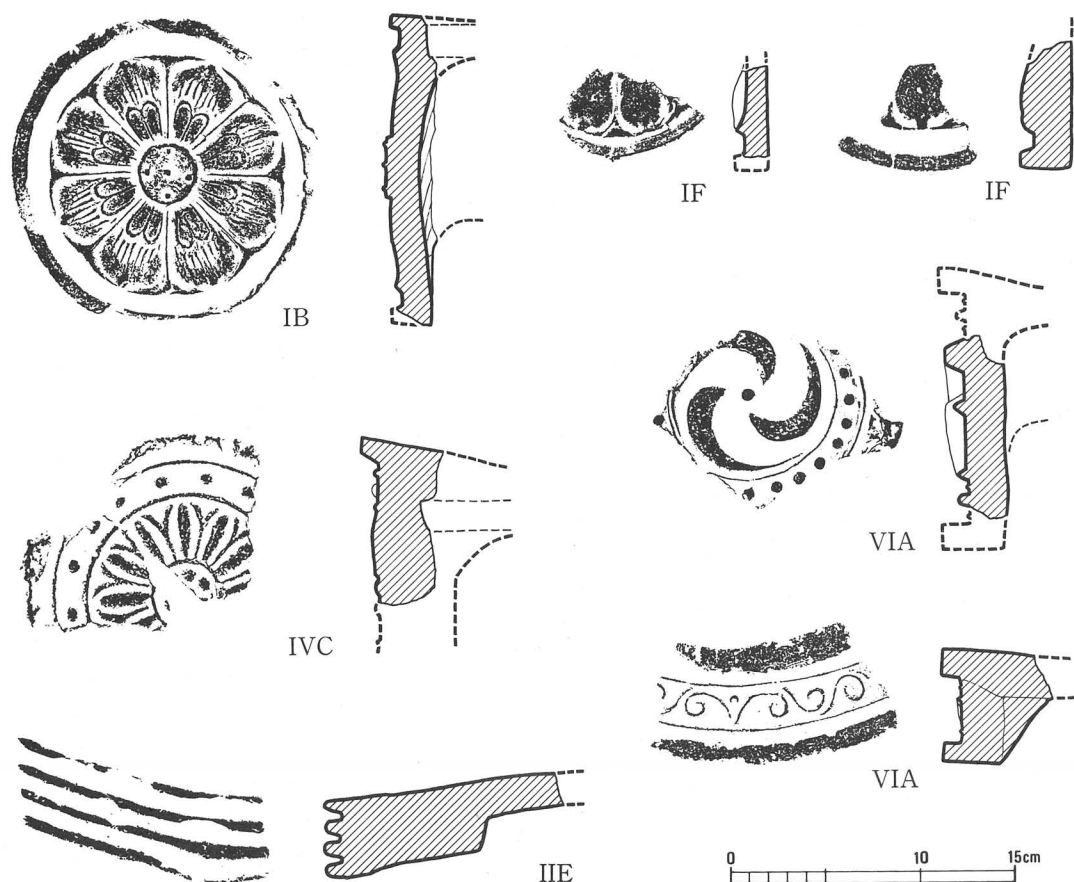
礎石の西1.5mの南北溝は出土遺物からみて後世の溝であるが、東岸に西雨落溝の痕跡が残っており、ほぼ位置を踏襲したものとみられる。また東側の回廊基壇土の縁辺にもわずかに溝の痕跡がみられ、残存する基壇土の幅がほぼ回廊基壇幅を示しているものとみられる。回廊造営

型 式		SB500	東回廊	計
軒 丸 瓦	I B	0	1	1
	I F	0	2	2
	II A	2	0	2
	III A	4	4	8
	IV A	4	0	4
	IV C	0	1	1
	VI A	0	1	1
小 計		10	9	19
軒 平 瓦	II A	1	0	1
	II B	2	1	3
	II D	1	0	1
	II E	0	1	1
	III A	4	10	14
	III B	1	0	1
	VI A	1	0	1
小 計		10	12	22
榑先瓦 B		0	2	2
総 計		20	23	43

第2表 出土軒瓦一覧
(中間集計、型式不明を除く)

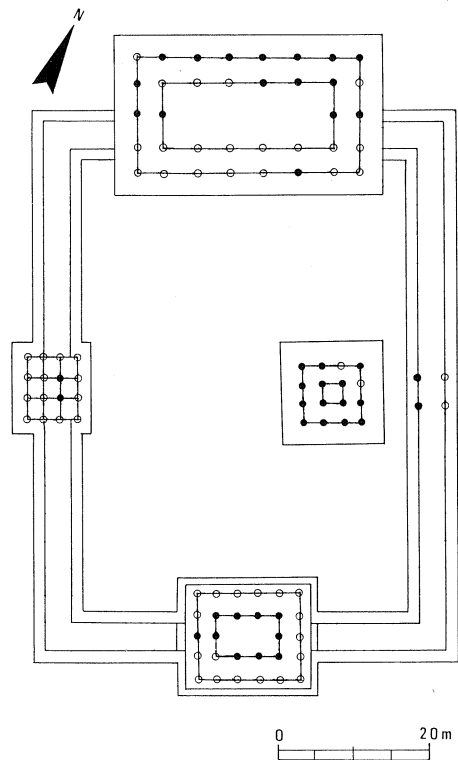
の年代は、基壇下の整地土層から7世紀前半代の土器や、軒瓦Ⅰ型式に伴うとみられる瓦片が出土したことからそれ以後である。なお、塔と一連の整地地業であることから塔造営に近い時期とも考えられるが、整地土に金堂所用軒瓦（Ⅱ型式）に伴う瓦の含まれない点を考慮すれば、回廊の造営年代は金堂造営時に遡る可能性がある。また、整地地業が個々の建物毎に行なわれたとも考えがたく、整地地業は金堂造営時に回廊部分をも含めて、一時に大規模に行なわれたものと考えられよう。

遺物 土器、瓦、鉄滓などがあるが、大半が後世の瓦層や南北溝から出土したものである。軒瓦はこれまでの成果によってⅠ～Ⅵ型式に大別し、Ⅱ型式が金堂、Ⅲ型式が講堂・塔所用と考えている。Ⅰ型式の軒瓦は種類の多さに比べて量は少なくその所用堂宇も明らかでない。前身伽藍の廃絶後に整地土層に入り込んだものであろう。なお、ⅠF型式は今回が初出である。



第28図 出土軒瓦実測図（1：4）

まとめ 今回の調査では、塔西方の小土壇が南北3間、東西3間と推定される基壇建物SB500であって、門跡と考えられることを明らかにし、東回廊についても桁行3.7m、梁行3.6mの単廊であることを明らかにした。SB500は講堂と金堂とのほぼ中点の西方にあり、塔のほぼ西正面に位置することや、建物方位が互いに共通していることから、一体の伽藍を構成することに疑いはない。しかし、年代・位置の上でより厳密に、いかなる関係にあるかについては、調査が小規模であるうえに、遺構の残存状況が悪く、十分に解明されたわけではない。東回廊についても、北側を大きく削平されているなど同様の状況であり、伽藍全体を合理的に理解するには、なお残された課題が多い。しかし、SB500の位置付けを含めて、現時点で伽藍配置を想定するならば、第29図のように考えられよう。



第29図 伽藍想定図（1：1000）

これは、先述したSB500と金堂・講堂・塔の位置関係に加えて、1. 東回廊の位置が伽藍中軸線で折り返した場合にSB500と対称位置にあること、2. 金堂調査で確認した下成基壇石敷の欠失部が東と西の短辺で幅広く、南と北の長辺で狭い不自然なものであって、東西辺の欠失部に回廊あるいは築地がとりつくと考えることができ、その幅が回廊の梁行柱間に近い3.75mであること、などを考慮して想定したものである。しかし、先述したように、この想定にも数多くの問題点が含まれている。それには、今回検出した回廊が極めて小範囲であり、SB500への取り付けや厳密な寸法の考定に不明な点が多いこと、第3次調査では講堂の東西側面に回廊がとりつくとの成果を得ていないことなどがあげられる。これらの諸点の解明、および、I型式の軒瓦を用いた桧隈寺の「前身遺構」については、今後、回廊四至の調査などを通じて究明してゆきたい。